

〈研究ノート〉

ラフ族の創世神話に関する一考察

柏 木 豊 美

目 次

はじめに

I. 口頭伝承の文字化

1. ラフ文字による口頭伝承の記録
2. 漢語による口頭伝承の記録
3. 先行文献による創世神話“牡帕密帕（ムパミパ）”の特徴

II. 創世神話“牡帕密帕（ムパミパ）”

1. 創世神話のモチーフ
2. 創世神話の類話における変化の形

表-1

おわりに

参考文献

はじめに

本稿は、ラフ族の服飾や生活文化に関わる創世神話について、創世史詩と創世故事のテキスト分析を通して、その構造と内容について考察したものである。ラフ族の服飾については、既に修士論文「ラフ族の服飾文化—諸相と変容—」において服飾と文様に関して特徴と変化についてまとめており、本稿ではそれを基にした。

ラフ族は20世紀になるまで文字を持たなかったが、口頭伝承の神話を通して歴史や文化を伝承しており、それは彼らの知識や技術、決まり事を伝えるものであり、彼らの日常生活に欠かせない教科書でもあったと思わ

れる。本稿では、生活文化の視点から創世神話について考える。

中国のラフ族は、総人口約47,5万人（2010年人口調査）である。そのうちの約20万人が雲南省瀾滄ラフ族自治州に集中しており、居住地はワ（佯）族、タイ（傣）族、ハニ（哈尼）族、プーラン（布朗）族、イ（彝）族、漢族などと入り組んでいるが、一つの村の中に各民族が混在することはなく、土地条件の良好な盆地にはタイ族が居住しており、ラフ族はタイ族の勢力下に置かれている¹。

ラフ族は、古代「羌」（チャン）を祖先に持つ民族という伝承を持ち、青海、四川を経て雲南、東南アジアへ移動を続けた跨境民族である。ミャンマー東北部に約14万人、タイ北部に約4万人、ラオス及びベトナムに約1,5万人が住む。チベット・ビルマ語群イ語系のラフ語を有する²。

I. 口頭伝承の文字化

1. ラフ文字による口頭伝承の記録

ラフ族は歴史上自民族の文字を持たず、伝えたい事柄は、木に印を刻む、縄を結ぶ、実物を持つ方法で伝えた。歴史や文化は、神話や民間伝説の形で主として宗教の指導者である魔巴（モバ）や老人による口承により受け継がれてきた。内容は民族の根源、祖先の移動、神鬼、愛情、諺、迷信などである³。

1949年以前のラフ族は、1920年代にミャンマーで造られ、宣教師によってミャンマーから雲南省瀾滄のラフ族地区に伝えられたローマ字綴りの文字を使っており、讚美歌や新約聖書が書かれている。この時期はこの他に、タイ語、漢語も借用語として使用していたが、1950年以降になると漢語の借用語が絶対的に多くなった⁴。

1 [馬、2013：2]。

2 [田畑久夫他2001：149～150、237]。

3 [雲南省編集組：1981、44]、[雲南省編集組：1982、104]。

4 [岡本：2008、334～335]、[雲南省地方志編纂委員会：1998、282～283、638]、[王、和：1999、14～233]。

ラフ族には宣教師文字方案、雲南ラフ文字方案、ジェイムス・マチソフ文字方案の三種類の文字方案があり、先行文献によると以下のようなものである⁵。

先ず、1910年にアメリカのキリスト教の宣教師等がラフ族の一支系ラフナ（拉祐納）が使用するラフナ方言に基づき、ローマ字を用い表音記号を造った。この文字は“老拉祐文字”と言われる。この宣教師文字方案は、キリスト教とカトリックをラフ族地区に伝播させるために作られ、現在のミャンマーの教会の学校で試行された。

1925年になると、瀾滄県糯福郷の教会の学校がキリスト教を信仰するラフ族とワ族の青少年にラフ語を教え、成績の優秀な者に新約聖書や賛美歌、簡易な医薬の常識を翻訳させた。1949年には、瀾滄、双江、耿馬、臨滄、孟連などのラフ族とワ族のキリスト教徒はこの文字を普通に使用した。ミャンマー、タイ、ラオスのラフ族もこの文字を使用し本と雑誌、歌集を出版した。

一方、1952年から中国科学院言語研究所が雲南少数民族の言語調査を始め、1954年無文字民族の文字創立問題を報告し、1956年に中国科学院言語研究所、雲南省民族語委員会及び雲南民族学院の言語調査団が瀾滄、双江等の専門家とラフ族幹部と共に調査団を作り、瀾滄、双江、景谷、耿馬、臨滄、滄源、西盟、孟連、勐海等の各県において全面的に調査した。

その結果、瀾滄県糯福地区のラフナ方言を標準とした雲南ラフ文字が造られ、1958年より瀾滄県の広範囲に置いてこの雲南ラフ文字方案が試行された。これに伴い、民族関係の図書の出版における問題を解決するために、1957年雲南省に民族出版社を創立し、口承による文化と生活の歴史を民族の文字で記録し始めた。

しかし、1960年代の反右派闘争及び大躍進の影響により雲南ラフ文字の普及と使用が中断した。1964年に使用が再開されたが、1966年に文化大革命が始まり10年間中断があった。その後、1976年に使用が再開され、

5 [雲南省地方志編纂委員会:1998、282～283、638]、[王、和:1999、14～233]、[岡本:2008、334～335] 参照。

ラフ族の研究者や学者がラフ文字を用いてラフ族の社会歴史、経済、宗教、文化、風俗習慣等を収集整理した。1979年になると、ラフ文字の教科書を小学校で使うようになるが、漢文とラフ文字の両方の使用は低学年には負担が大きかった。

もう一つの方案に、アメリカのチベット・ビルマ語の言語学者マチソフが創ったジェイムス・マチソフの文字方案がある。ラフナ方言を基にして造ったラフ語で、彼はラフ語—英語、英語—ラフ語の辞典を書いている。しかし、この法案は学術研究の方面で使用されただけで広く民間に広まることはなかった。

さらに劉によると⁶、1984年、李文漢が編集したラフ文版単行本の『MUDPHALMILPHAL』（ラフ語のムパミパ）が雲南民族出版社によって出版され、初めてのラフ文版となった。その後1992年に、胡扎克、彭華編集によるラフ文版のラフ族創世史詩『ムパミパ』が雲南民族出版社により出版された。

2. 漢語による口頭伝承の記録

漢語によるラフ族の民間文学出版の動向は、先行文献によると、以下のようである⁷。

ラフ族の民間文学は、中華人民共和国成立前は口頭伝承のみで、書面の記録はなかった。1950～60年代にかけて漢族とラフ族の民間文学を研究する人々が、伝えられてきた口承文学作品を収集整理し、漢文とラフ文を対照する形式で出版し始めた。

しかし、1966年に起った文化大革命によって、民間文学の収集整理は大きな打撃を受けた。現地に向向いての収集整理は出来ず、室内での収集整理の過程で物語を作る、偽物を本物に混ぜるなどのごまかしや手抜きがあった。また、基本的な筋を除いて語彙は正しいものとそうでないものを

6 [劉2010: 10～11]。

7 左、劉 [1979:62～69]、編集組 [1986:81～83]、劉 [2010:10～11]、楊 [2011:100～101]。

照合し、入り混じった文章や節は調整し削った部分がある。文字の修飾も行われたが基本的に原型を留めるようにした。整理は創作ではなく、口頭文学を忠実に記録したうえで手を加え真偽を選別し雑物を取り除き本物を残したと述べているが、当時の政治状況に合わせ社会主義の精神に反するものは雑物として捨てられたと思われる。

その後、1978年に少数民族文学を専攻する学科が高等学院等で開設されることになり、教材の編集を各民族学院と辺境の高等学校が共同して行うことになった。このような状況の中、1981年に中国少数民族文学作品選編集委員会編、上海文芸出版社の高等学校文科教材『中国少数民族文学作品選 第5分冊』が出版された。この中に、ラフ族の創世史詩『ムパミパ』があるが、第一部 天地創造、第二部 万物創造は省略され、第三部の生活して行く部分の第1章“始祖の結婚”、第2章“最初の人間”部分のみが掲載されており、偏った編集であると思われる。

1980年代中期以降、ラフ族の中高等教育を受けた人が自民族の民間文学研究に携わるようになり、多くの民歌、故事、神話伝説、諺、寓話が整理翻訳され出版されるようになった。

漢語による出版は、1978年に、劉輝豪が編集整理し、辺境文芸編集部が編集した漢文版「ムパミパ」で『辺境文芸』第三期に掲載され、辺境文芸社より出版された。その後、この『辺境文芸』第三期に掲載されたものが、一番早く1979年に単行本として雲南人民出版社より出版された。

一方、ラフ文と漢文の対象版が出版されるようになり、1989年に瀾滄ラフ族自治州文化局、県民族事務委員会編集の、ラフ文漢文対照版『ラフ族民間詩歌集成』が雲南民族出版社より出版され、第一番目のラフ文漢文対照版となった。その後1996年に、ラフ族の編集整理の女性作家ナド（女那朶）によるラフ文版と漢文版がある『ラフ族民間文学集』が雲南人民出版社より出版された。

以上の選考文献によれば、“ムパミパ”が最初に文字の形で登場したのは1970年代末であり、それも漢文版による出版であった。しかし、1980

年代後半から、雲南ラフ民間文学編集委員会は、ラフ族文学の発掘調査を進め、ラフ文の“ムパミパ”を出版した。これは、ラフ族の創世神話に文学的価値及び社会科学的価値があることを認めると共に、ラフ族出身の研究者が現れて自民族の文化を研究することを示唆するものであろう。

3. 先行文献による創世神話“ムパミパ”の概要と特徴

先行文献によると、“ムパミパ”の概要と特徴は以下のように書かれている。

陶〔1979：70～73〕によると、“ムパミパ”は古代のラフ族社会における労働者に対する賛歌で、古代のラフ族と自然災害が作る闘争の祝辞である。“ムパミパ”は、ラフ族人民の集団による制作で、ラフ族が長い年月の労働の中で大自然と闘い生活してきた結果できた、経験上の教訓を歌にして歌う。“ムパミパ”は完全に古代社会の現実を基礎として生まれたのである。

史詩の中のウシャ（厄莎）は神話の中の神で、決して宗教の神ではない。明らかに、ウシャはラフ族の部落の首領であり、或いはラフ族の部落連盟の首長である。“ムパミパ”の中の天神ウシャは労働者の化身である。

拉祜族簡史編集組〔1986：81～83〕によると、口頭文学の中で最も広範囲に伝わっているのが史詩“ムパミパ”である。内容は、天地創造、人類が出来て一夫一妻制ができるまで、鉄工具の使用、祝日や祭りがあるようになる、農耕社会の四季に分けられる。この史詩に定型はなく、毎回唱える民間詩人の理解度や知識水準の違い或いは表現力により長短は異なる。編の名称も地域により差がある。

また、王〔1999：307〕によると、“牡帕密帕”は、“牡国密压”“牡爹密爹”“牡国密国”という別の名称があるが、すべて天地創造を意味しており、内容は天地・万物・人類の起源である。しかし、天地・万物の起源については、各地に異なる解釈がある。瀾滄江西岸のラフ族は、混沌が創造主を生み、創造主が天地・万物・人類を造ったと考えているが、瀾滄江東側の

哀牢山地区のラフ族は、火が天地を生み、天地が神を生んだと考えている。

2006年の雲南省思茅市申告による中国文化網によると、“ムパミパ”は三部に分かれており、全詩は17章2300行ある。万物の創造と人類及び人類の初期段階の生存状況などを叙述しており、歌うのは“嘎木科”といわれる詩人と“魔巴”という宗教活動の指導者が主として歌う場合と多くの人が参加し輪唱する場合もある。歌詞は大衆向きで簡潔である。音階は地域により差がある。伝統的な祝日や節句、宗教活動や農閑期に歌う。現在、瀾滄ラフ族自治県内で完全に歌える人は一人か二人しかいない。

上記のように、“ムパミパ”の内容の解釈は、その文献が書かれた時代の社会状況や、ラフ族の文学に関する研究の進歩によりそれぞれ異なっている。

II. 創世神話 “ムパミパ”

1. 創世神話のモチーフ

創世史詩“ムパミパ”には、管見の限りでは4種のテキストがある。1979年に雲南人民出版社出版『ムパミパ』⁸ラフ族民間史詩（以下、79年版と記す）は“ムパミパ”の基本形であると考えられる。それは、これが最初に漢文で出版されたものであることや、他のテキストと比較した場合、最も神話のモチーフが揃っており、他はこれの一部が欠ける、或いは変化したものと考えられるからである。

谷野〔1983：8～9、27～31〕によると、雲南少数民族の創世神話には共通するモチーフがあり、それを4種に分けて類型別にするると以下のようであるとしている。

①死体化生モチーフは、ア：動物や人間の死体から宇宙の事物が発生した。
イ：生きた動物や人間の身体の各部分が宇宙の事物に生まれ変わる（生体

8 牡帕密帕はラフ語で天地創造の意味。ム(牡)は天、パ(帕)は開拓、創造、ミ(密)は地を意味する。「無形文化遺産の観点から見たラフ族創世史詩“ムパミパ”」〔劉、張2010：3〕。

化生)。ウ：創造神が身体の垢を擦りだし、それをこねて万物を創造する。

②天を支える柱（天柱）モチーフは、ア：動物の四肢や樹木、金属などの柱が天を支える。

③魚が大地を支える（魚の大地）モチーフ、ア：巨大な魚や亀、その他の動物が大地を支えている。イ：原初、陸地はなく天と海だけがあった。

④天地分離モチーフは、ア：天と地はくつついており、創造神が切り離れた。イ：天と地は近くにあり、天に続くはしごで自由に行き来できた。ウ：巨人または人間が天と地を押し広げた。エ：世界の中心に天を貫く樹木（世界の樹）がある。

上記のモチーフをラフ族の創世神話に当てはめてみると、79年版のモチーフは、①－イ、ウ、死体化生モチーフの創造神が垢（ラフの場合は汗）を擦りだし、それをこねて万物を造る。②－ア、天を支えるのは金銀銅の金属の柱である。③－ア、大魚（4匹）が大地を支える。④－ア、天地はくつついており、創造神が切り離れた。というものが見られる。

79年版はラフ族が口頭伝承してきた韻文形式の創世神話である。全体で61頁あり、第一章の前に歌頭が1頁ある。第一章天地創造は8頁、第二章万物の創造は16頁あり神話の要素が強く幻想的である。第三章生活していくは34頁あり、ラフ族がそれぞれ違う時代に得た社会生活の知恵を教えており、ラフ族の歴史物語となっている。最後に、歌尾が1頁あり終わっている。

抄訳は以下のようになり、解釈は筆者によるものである。

歌い出し

みんな一緒に先祖の偉業をたたえようと語りかける。

解釈：歌い手と民衆が輪唱する調子合わせと思われる。

第一章 天地創造

天神ウシャは、既に蜘蛛の巣が張った様な宇宙の中心に居て、天地創造が始まる。

天神ウシャ（厄莎）と助手のザルオ（扎保）、ナルオ（娜保）⁹が、天

地を分離し日、月を造る。

第二章 万物の創造

天神ウシャが手足を擦り汗を出して、その汗で鳥類を造る。

鴨に溝を掘らせ水が出てくる。

天神ウシャが植物を植える

ザルオ、ナルオが12か月を造る。

動物が現れる。

家を造る。

火を得る。

瓢箪の種を天神ウシャが撒く。

人間がこの世に出てくるのを待って、家を建てる、布を染める、米を搗いて餅を作る、農具を造る。

瓢箪を雀と鼠が突いて人間の男女が瓢箪から出てくる。

解釈：第三章で個別に歌われる“火を得る”“狩り”“分配”“家を建てる”の項目が一度この章に出てくるが、“人間がこの世に出てくるのを待って”と言う前置きがあり、二章にわたり繰り返すことで、天神への感謝の念を持たせようとしている。

また、天神が瓢箪の種を撒き、瓢箪が大きくなり中から人間の男女が出てくると言うのは天神は男女一対の神であり、瓢箪はその形状や中に種が多くあることから子宮と見ている。一方で、瓢箪の実が熟して蔓が切れて湖に落ち漂流し、最終的に天神に見つけてもらい中から男女が出てくるというのは、ノアの箱舟を連想させる。

今日、雀が一番に実った穀物を食べることができ、鼠が穀物蔵で穀物を食べることができるのは瓢箪を突いて人間をこの世に出してくれた事への感謝の気持ちを表すものである。

9 男の神一厄雅、女の神一莎雅を習慣で天神厄莎という。扎一男性の名前の定冠詞、丈夫で体力に優れているという意味。娜一女性の名前の定冠詞、温和で従順という意味。笛一後に続くという意味。倮一増す、添える、補うという意味。『中国民間故事集成雲南卷上冊』〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：48～49〕。

第三章 生活していく

1. ザディ（扎笛）、ナディ（娜笛）¹⁰の結婚

解釈：兄妹婚である。

2. 第一番目の人

子供が多過ぎたので、様々な動物に乳を飲ませてもらい育てさせたので、大きくなってから育ててくれた動物の肉を食べないこと。

子の名前に育ててくれた動物の名を取って付ける謂れ。

3. 火を得る

雷が山の斜面に落ち、鼠が火種を得る。山火事が起こる。火打石が出来る。

解釈：山の斜面での焼き畑農業の始まり。鼠が一番に火種を得たことで十二支のうちで一番初めになったとおもわれる。

4. 狩猟

狩りで獲物が手に入りその肉を分けて食べたが、その獲物の食べ方の違いによりラフ族、ワ族、ハニ族、漢族、老緬族、タイ族に分かれた。ラフ族になった人は、囲炉裏でゆっくり炙って食べた。

次に天神ウシャは、鳥に調理方法の違いにより分かれた民族をそれぞれの住むべきところに連れて行かせた。タイ族は平地の水辺に、漢族は山腹に、ワ族は高い山の頂上に、ラフ族は山の尾根に連れて行かれて棲みついた。

解釈：ラフ族のラ=拉はラフ語で虎、フ=祐は香ばしく焼くの意味。また、棲み分けは部族の力関係により定まったとおもわれる。

5. 分配

兄妹は野菜や蜂蜜取り、狩りに精を出す。狩りで獲物を得て血と肉を分けるが、分け方に男女の差ができた。妹は蟻が穀物を運ぶのを見て“男女の差がない。整然と並んでいる”と思い、自分たちの

10 天神が造った第一番目の男女。ラフ族の祖先とされる『ラフ族』[楊2011：103～104]。

やり方につながりする。

解釈：食料の分配と貯蔵。かつて、ラフ族には女性を家長とする制度があった。

6. 家を建てる

鳥や鼠に巣があるのに人間には住む家がないと思い、兄妹は木と竹で家を作る。荒れ地の木を引き、茅で屋根を葺く、割いた竹で壁を編む。出来た家は四角形で玄関は朝日に向かっている。

解釈：家を建てる場所と方法を教えている。

7. 農具を造る

鋤脈を見つける。鍛冶屋を連れてくるが、動物の体から農具を造る。生産がよくなる。

解釈：初めに動物の骨で道具を造った。

8. 穀物の種を植える

鳥が嚙嚙に一粒の種を入れて運んできた。天神ウシャは兄妹に“一粒を撒けばたくさん粒が取れる”と教えた。月ごとの稲の生長の様子や農作業及び新米を炊く様子が歌われている。

解釈：農耕の始まり。

9. 棉を植える

棉を北京から持って帰る¹¹。棉を採取し、機織りの後染色して衣服を作る。穀物の収穫後に家で織る。衣服があると、狩りに行って豹に咬まれることは怖くないし農作業の時の暑さ寒さも気にならない。

解釈：手工業の始まり。北京とは中央政府のことと思われる。

10. 鶉が踊る

天神ウシャは、ラフ族の正月を決める。男が芦笙を吹き、女が口琴を鳴らす。歌や踊りの様子、村の様子が歌われている。

解釈：収穫が終わり年越の祭に何をするかを伝えている。

11『雲南省ラフ族社会歴史調査材料2』[1963：32]。

歌い終わり

年越しになり、一年の辛苦を忘れ歌い踊り楽しく過ごそうと歌っている。

2. 創世神話の類型における変化の形

79年版以降は、ほぼ10年おきに漢文で出版されており、その概要と構成内容の変化を比較すると次のような異同がみられる。

表-1

モチーフ		テキスト	①1979年『ムパミパ史詩』単行本 瀾倉、孟連、双江地区の伝承	②1988年「ムパミパ史詩」『ラフ族民間文学集成』瀾滄地区の伝承	③1995年「ムパミパ故事」『中華民族故事大系』瀾倉、孟連地区の伝承	④2009年「創世神話」『雲南少数民族社会歴史調査』瀾倉地区の伝承
		原初	原初の状態	○	がらんとしている	天地はくっついている
原初	天地の分離者	天神とザルオ、ナルオ	○	○と アド、アガ	蜘蛛。ザブ、ディブ	
	天地分離の方法	手足を擦り、4本の柱と4匹の魚を造る	○	○ 天の網、地の網を造る	蜘蛛の糸で引っぱる	
	日月星一年	創造者と材料	天神。天神の目と髪	○ 雄鶏	○ 蛙	ザルオ。犁、蛙
万物の創造	創造者	天神	○	○	○	
	鳥	手足を擦る	○	×	×	
	水	鴨	鳥、蟹	○	×	
	植物	植える	木の実、枝	種を造り、鳥が撒く	地表を造り、水中に木を植える	
	一年、四季	ザルオ、ナルオ	×	天神の手足の骨	×	
	獣、魚、鳥	話し始める	木の枝、葉	天神が手足を擦る	木の枝、葉	
	瓢箪の種	灰の中の箱	灰の中	木の下の方の中	×	
	物を造る（人が世に出るのを待って）	藍染、粍粍、籠、斧	○	×	×	
人	瓢箪の中の男女	○	○	○、天神が息子ザヌザベを産む		

生活していく	結婚	兄妹婚	○	○	○
	一番初めの人	多くの子供を動物に育てさせる	○	○	×
	火を得る	落雷による山火事	○	火薬の銃、火縄銃、火打石	猿が木を擦るのをまねる、山火事
	狩り	民族が分かれ、棲む所が分かれる	○	○	×
	分配	蟻の行列をみる	○	×	×
	家を建てる	鳥や鼠の巣を見る	×	○	×
	農具を造る方法と材料	鉱脈を見つける。鍛冶屋を連れてくる。麝香鹿の体から造る	○ ×	× キョンの骨	○ 鉄
	穀物の種を植える	鳥が運んできた水稲と陸稲	○	○	天神ウシヤ、粟
	棉の種を植える	北京から持ってくる。機織り、染色、衣服を作る	△	×	×、野生の棉、芭蕉の葉で衣服を作る
	鶉が舞い踊る	祭り、正月を決める	○、文字を与えられる	○	×
					兄妹の子が違う言葉を話し始め、各民族ができた

表-1の②雲南ラフ族民間文学集成編集委員会編、1988年、中国民間文芸出版社出版「神話史詩ムパミパ」『拉祜族民間文学集成』は韻文形式の史詩で89頁ある。デュエットで歌われており、第一部天地創造は10頁、第二部万物の創造は31頁、第三部人はどのように生活してきたかは49頁ある。現実の生活の歴史部分が多く歌われているところは79年版と同じであるが、歌頭や歌尾はない。また、第三部の最後は「文字を与えられる」という文言で終わっており、時代ごとの新しい発見を付け加えて歌っているのか、79年版では歌われなかったのかは不明である。

抄訳は以下のようなものである。解釈は筆者による。

創世期

第一部分 天地創造

天神ウシャが天地を造る時、ザルオ、ナルオに手伝わせる。ウシャの目で太陽と月を造る。雄鶏を造り三回鳴かせて昼夜を造る。一日、一年を造る。

第二部分 万物の創造

一. 水を探す

天神ウシャが、孔雀に教えられた箱の中の種を撒き芭蕉の木が育つ。天神ウシャは、蟹を造り芭蕉の根元から水を出させる。

解釈：“孔雀”はタイ族を水のある平地に連れて行った鳥で、タイ族の象徴である。

二. 木を植える

天神ウシャが1本の木を植えて育てる。その実、葉や枝が様々な木、草、鳥、動物に変化する。すべての生物が有るようになり、動物に住む場所を与えた。その後ザルオ、ナルオに見に行かせると“それぞれの場所に動物は居て、しきりに鳴いているが人の気配がしない”と報告を受ける。

三. 瓢箪を植える

天神ウシャの家の箱の中にあつた種を植える。実は熟したが野牛に蔓を伐られる。ウシャは転がる瓢箪を探す途中で出会った竹や茅草に“瓢箪を見なかったか”と尋ねるが、みんなは知らないというので罰を与える。瓢箪は湖に転がり、蟹が拾う。ウシャは瓢箪を家に持ち帰り乾かす。雀と鼠が突いて中から人間の男女ザディとナディが出てくる。

第三部分 人はどのように生活してきたか

一. ザディとナディ

瓢箪の中にいた男女の子供を天神ウシャが育てる。兄妹が様々な動物に襲われそうになると、天神ウシャは猛禽は“畏を仕掛けて縄で縛

る”、動物は“穴を掘り陥れる”と教え、“気持ちを大きく持つように”と言う。兄妹は大きくなり芦笙と口琴を作り吹くようになる。

解釈：狩猟の方法を教える。芦笙と口琴は男女の恋愛を表現する。

二. 兄妹の結婚

天神ウシャが様々な策を巡らせ二人を結婚させようとするがうまくいかない。最後に天神ウシャは甘い薬を作り二人に飲ませた。ザディとナディは茅屋の林の中や暗い山奥で密かに結婚していた。

解釈：ラフ族の交際と結婚は自由であるが、村の中ではなく人目のつかないところで逢わないといけないという決まりがある。

三. 一番初めの人間

ザディとナディは結婚したが三年経っても子供ができないので、天神ウシャが、二人の身体を銀の針で刺したら、ザディの脛に子供ができた。歩いて行くと赤ん坊が抜け落ちた。ナディが可哀想に思いズボンで包んだら、たちまちナディのお腹に入り込んでしまった。この時から、妊娠するのは全て女性になった。

子供が多く生まれ過ぎた。天神ウシャはあらゆる動物を呼び子供を育てさせた。天神ウシャは子供に、“育ててもらった動物の肉は大きくなっても食べてはいけない”と教える。子供たちは大きくなっても名前がないので天神ウシャは、育ててもらった動物の名をつける。

四. 火を得る

天神ウシャが心臓を穿り出し山頂に置くと雷が鳴り閃光が火花を散らす。山の尾根で火花を奪い合い、一番初めに火を得たのは鹿だった。鹿は炎と人間の羽を交換しようと思った。鹿と人間は話し合い炎と羽を交換した。鹿は人間に“火を手に入れたら、地面を焼き肉体労働があるようになり、飲食物が手に入る”と言う。

解釈：山の斜面での焼き畑農業の始まり。

五. 狩り、民族を分ける

竹で鉄砲を作り、狩りに出かけ豹を捕まえ分けて食べた。調理の方

法や食べ方の違いにより民族が分かれた。次は、天神ウシャが鳥類に各民族が住むべきところに連れて行かせた。

六. ザルオとナイ

山での野菜採集、蜂蜜採集、狩りで生活をするが分け前が男女で均等ではない。蟻が穀物を整列して運ぶのを見て真似る。

解釈：貯蔵をするようになる。

七. 鉄鉱石を探す

1. 蜂を焼く

世の中の人が日に日に多くなり、食べることに着ることすべてが大変困難だった。ザルオとナイは人間に生産の方法を教える。天神ウシャは、イナゴを木につるし地蜂を誘きよせる。地蜂が飛んでいった巣穴は実は鉄鉱石のある所だった。

2. 鉄の鉱脈を掘り当てる

鉱脈を見つけるが、道具がない。鹿の角で鉱脈を掘る。

解釈：初めは作業用の道具は動物の骨を用いた。

3. 製鉄する

ザルオとナイが山で栗の木を見つけてきて炭を焼き製鉄する。ウシャは秤を作り、鉄と銅一斤を銀三銭で売るように言う。しかし、荷を積むものがない。ウシャは、竹で1匹の騾馬を作り、それに鉄を載せ売りに行かせる。

市に着いたが、誰も買いに来ない。漢族、タイ族も来ていて彼らの馬を繋ぐ所には餌がちゃんとあるが、ラフ族の馬を繋ぐ所には餌がなく全部死んでしまった。これ以後、ラフ族は商売をしなくなり、騾馬も飼わない。

解釈：定期市での民族間の関係が見てとれる。

八. 農業活動

鉄と銅を背負い市から帰った人々は天神ウシャに言う、“食べられる木、竹、草は少しも残ってなくて、食べられるものはすぐに食べ

終わってしまった。”ウシャは、みんなに言い聞かせた、“生活する方法を考えれば人はこの世で生きていける。”

1. 農具を造る

鉄を打つ道具がない。天神ウシャは麝香鹿を捕まえ、その体からふいご、砧、杵などを造る。鍛冶屋が来て鉄を打つがうまく打てない。草刈鎌を打ち出した。鍛冶屋はリス人¹²を探しに行き犁の作り方を学び、犁をうまく作ったので田を耕し農作業ができるようになった。

解釈：周辺の民族から、様々なことを学んでいたラフ族の様子。

2. 家を造る

ザルオとナイは山野を歩き、斧で竹と木を伐る。家を建てようと思いが造れないので鼠の巣を見に行き、冬には新しい家ができた。

二人は竹や木を乾かし、火打石で火をつける。火事が平地や山の頂上まで広がり、ウシャのところに行き火を消してくれるように頼む。ウシャが雨を降らせて火が消える。そのあとに、水田が出来ていたが、水がないのでザルオとナイは山から山間の平地まで溝を作る。

解釈：家を造り、定住する。農耕が始まる。

3. 種を探す

田んぼが出来、水もあるのに撒く種がない。ザルオとナイは彼方此方探す。天神ウシャの娘が米を搗いていて、米を篩った時一粒のモミが落ちたので、イカル¹³が飛んできて食べた。

ザルオとナイは穀物の種がないので天神ウシャに聞きに行った。ウシャは言った“穀物の種はイカルが銜えて行った。三日後、イカルは、喉が渇き水を飲みに来る。”二人は麻で縄を編み、イカルの足を捕まえた。ウシャはイカルの嚙嚢を開き種を取り出した。イカルが苦しんだのでウシャはイカルの嚙嚢を直してやるとイカルは飛んで行った。

12 リス（倮倮）族のこと。〔雲南ラフ族民間文学集成委員会1988：76〕。

13 スズメ目アトリ科の小鳥、全長20cm内外、体は灰褐色、頭・顔・翼・尾は紺色〔2008：大辞林電子版〕。

解釈：穀物の種が何によつてどのようにもたらされたか。西南少数民族には、犬が尾に付けて持ってきたという説もある。

4. 薬草

地蜂や蛇に元々毒はなかったが、天神ウシャが彼らに毒があるようにした。蛇の洞穴の入り口に豹が住みつき蛇は中に入れないので、咬みついたら豹は死んでしまった。天神ウシャは、豹が死んだことに気づき蛇に聞くと“咬みついたら死んだ”という。ウシャは薬を蛇に持たせ豹を助けるように言う。豹は目を覚まし元気になった。蛇はウシャの薬を持ち岩の下に住んだ。

ハンセン病の孤児が来て洞穴の蛇を捕まえて、土鍋で煮て蛇の薬をつけたら治った。道端の死んだ鳥や犬につけたら生き返った。家の入り口に置いておいたら風に飛ばされ太陽に照らされ地面に落ちて薬草になった。

九. 穀物を植える

ザルオとナイはイカルの嚙嚙を開き種を出す、あまりにも少ないのでがっかりする。天神ウシャは“水稲は水田に、陸稲は山の斜面に撒くように”言う。一粒の種が万の種になる。

解釈：稲作の方法。

十. 祭りを決め、文字を発明する

天神ウシャは各族に文字を与える時、ワ族には牛の皮に書いて与え、ラフ族には餅の上に書いて与えた。漢族には紙に書き、タイ族には木の皮に書いて与えた。

天神ウシャは、文字の次に各族に祭日を与えた。ラフ族の祭りのとき、ウシャもそこに行き歌い踊る。祭りが終わると男は狩りに行く。

解釈：ラフ族に文字がなかった理由は、正月に文字が書かれた餅を食べってしまったから。漢族やタイ族の文字を書いた紙や木の皮は食べられないので文字があるという。ワ族は正月に牛を殺してもよい。

十一. 棉花を植える

市に行き棉の種を手に入れる。河辺に焼き畑を作ってから種を撒く。棉が実ると摘み紡ぐ。糸にして布を織る。染めて新しい衣装を作る。新しい一年がまた来る。

解釈：棉の種の入手方法や栽培する場所、農閑期に衣服を作ることなど。又、ラフ族は糸を染めてから布を織るのではなく、織ってから染めることがわかる。

次に、表-1の③本書編委員会編、1995年、上海文芸出版社出版の「拉祜族民間故事」『中華民族故事体系第8巻』683～694頁の“ムパミパ”は散文形式の物語として書かれており章立てではなく、天地創造は2頁、物と人を造るは3頁、ザディ・ナディの結婚2頁、火を得るが約1頁、狩り・民族が分かれるは2頁、家を建てる～収穫までが2頁となっている。

物語の流れは史詩とほぼ変わらないが、天地創造の時、天神ウシャが造ったアド（阿朶）に天の網、アガ（阿戛）に地の網を造らせ手伝わせている。

抄訳は以下のものである。解釈は筆者による。

天地創造、

天神ウシャが天地を支える柱を造り、アドが天の網を三百六十万個編み、アガは地の網を三百六十個編む。ザルオ、ナルオが天と地を造る。ウシャが太陽と月、星を造る。

万物の創造

鴨に水を掘らせる。ウシャが手足を擦り様々な種を創る。ウシャが自らの骨で四季を創り、手足を擦って様々な鳥と獣を造る。

ウシャが、小屋の中の箱にある瓢箪の種を撒き灰を被せる。7ヶ月後大きな瓢箪が熟す。キョンが蔓を伐ってしまい、瓢箪は山を転がり見えなくなる。ウシャは山を下る途中で様々な木に出会い瓢箪の行方を尋ねる。“知らない”と答えた木に、“人がこの世にあるようになったら家を建てる材料にする”と言う。遂に、天神ウシャは湖に浮かぶ瓢箪を見つ

け蟹に取って来てもらう。

ウシャは瓢箪を持ち帰り、家の物干し台で乾かす。中から人の声が出て“私たちが外に出してくれた者に先ず穀物を食べさせよう”と言っている。これを聞いた雀は頑張って瓢箪を突く。鼠が来てかじり、穴が開き中から男女が出てくる。ウシャは、ザディ、ナディと名付ける。

解釈：今日、雀や鼠が、一番に穀物を食べても良い理由。

ザディ、ナディの結婚

ウシャはあれこれ知恵を絞って、遂に兄妹を結婚させる。子供が多く生まれたのでウシャは12種類の動物（干支）を呼び、それぞれ一種類の動物に男女一人ずつを育てさせる。

これ以後、地上に人があるようになった。

解釈：育ててもらった動物の名と、男性を示す字である扎（ザ）、女性なら娜（ナ）を組み合わせて名前を付ける。例えば、虎の乳を飲んで育った（虎年）男の子は扎拉（ザラ、ラは虎の意味）、女の子なら娜拉（ナラ）となる。

火を得る

ウシャが手足を擦り火薬の銃を造る。銃を撃ち白雲と黒雲を発生させ、風を起こして白雲と黒雲をぶつからせ、雷を起こす。火花が山の斜面に飛び、すべての動物が火花を持ち去った。

その頃、鼠は羽がなく人に羽があった。人は鼠の火が欲しいと思い、鼠は人の羽を欲しいと思った。鼠は人を探す勇気がなく、人は鼠を探せなかった。その後、尖った口の鼠が来て相談し、鼠は羽を得て、人は火種を得た。山頂から火を放ったら、草は全てを焼き尽くし、樹木は焼かれ、鳥は休む所がなくなり、獣は逃げ隠れるところがなくなった。

ウシャは、急いで火縄銃を造り白雲と黒雲を出してぶつからせ大雨を降らせて山火事を消した。今は、石の中に身を隠した火花と火草で火種を得る。

解釈：火打石の使用。山地斜面の焼き畑が始まる。

狩猟、民族が分かれる

石や棍棒を持ち大声で叫びながら、熊、豹、虎、野牛を深い穴に落とすとして捕る。魚は網で獲る。狩りの途中で木の下で休んだ人はラフ人になった。木は二枚の皮しかないのでラフ人の衣服は二枚しかない。芭蕉の木の下で休んだ人は漢人になった。芭蕉の皮は多いので漢人の衣服は多い。花の咲く木の下で休んだ人は、アイ二人（ハニ族）になった。アイ二人はおしゃれが好きで、花のように美しい。

遂に、虎を仕留めみんなで肉を分けて食べた。食べ方により、ラフ族、アイ二人、老緬人、タイ族、ワ族、漢族に分かれた。

その後、ウシャは、鴨にタイ族を平地に、水鹿にラフ族を山の中に、鶺鴒にアイ二人を山の斜面の中腹に、雀にワ族を山頂に連れて行かせた。漢族はどこに住んでもよい。

解釈：民族の棲み分が始まる。

家を建てる

鳥やねずみの巣を見て人にも家が必要だと思い、ザリとナリが栗の木、茅、竹や芦で家を建てる。小さな四角形で、入り口は太陽に向かっている。

農具を造る

探し当てた地蜂の巣は鉾脈だったので、水鹿の角で掘る。栗の木で炭を焼く。鉾脈から鉄が出る。鍛冶屋を探してきて、キョンの皮でふいごを、蹄で挟むものを、骨で錘と砧を造る。鎌と犁を造り、これ以後生産が良くなった。

種を植える

ザリ（扎列）とナリ（娜列）は、山の尾根を水田と畑に分ける。畑は草を刈り、干して火をつけ灰になったら種を撒くことは知っているが、水田はどうやって作るか知らない。天神ウシャは、水牛の角の模様を見て真似るように言う。しかし、畦がうまくできないので、燕や虫に来てもらい畦を作る。畦はうまくできたが撒く種がない。

ウシャは、カッコウに4粒の種を持って来させる。ザリとナリは、種

が少なすぎると言うが、ウシャは秋に沢山になるという。

種は三回撒く。三月に針のような芽を出し、四月は青々とした緑になり、五月は勢いよく茂りイナゴが来る。六月は白い花が咲き、七月は頭が垂れる、八月ははっきりした黄色になる。九月十月は刈り取りに忙しい。十二月には米を搗く。

男性は芦笙を吹き踊り、女性は手を取り円になり踊る。一年の苦勞と災難を送り来年の良い収穫を迎える。

表一 1 の④修訂編集委員会編、2009年、民族出版社出版の「瀾滄県拉祜族社会文化調査 創世神話」『雲南少数民族社会歴史調査資料彙編 4』48～49頁は、瀾滄県のラフ族社会の文化を調査し整理したものであるが、第一章の族称、族源の次に創世神話がきており、民族の歴史を創世神話に置き換えて語っているようである。

また、他の創世神話と同じ地区で採集したと言うものの、この文章の短さから見ると、かなりの省略とまれな事例を除いて、この地区に共通するものを書いているように思われる。よって、これを『瀾滄県ラフ族社会文化調査』に民族の歴史のように扱い、掲載するのは無理があるとおもわれる。

また、この物語が、表1の①から③と大きく違うのは、英雄神話として瀾滄地区に伝わるザヌザベの伝説¹⁴を創世神話の中に入れ込んでいることである。

物語は段落ごとに内容が分かれており、抄訳は以下のようなものである。解釈は筆者による。

創世神話

一段目

男の神ザブに天、女の神ディブに地を造らせる。

二段目

ザルォに日月星を造らせる。

14『扎努扎别』は王松、李曉村により収集記録され、1959年第10期『民間文学』に一番最初に発表された〔中国民間文学集成全国編集委員会2003：368〕。

三段目

動植物を造る。

四段目

天神ウシャが息子ザヌザベ（扎努扎別）を産む。ザヌザベは良く働いたがウシャに反抗し、ウシャの言うことを聞かず、穀物を貢がなくなったためウシャを怒らせ、傷を負わされ、それが原因となり死んでしまう。

五段目

その後、天神ウシャは、ザヌザベが死んで貢いでくれる者がいなくなり、人類を造ろうと考える。天神ウシャは体を擦り汗を出して汗を大きな瓢箪に変化させた。瓢箪の種が人に成る。

六段目

瓢箪の中から出てきたのは、多くの兄妹だった。一組の兄妹を残してみんなは各地に散らばって行ったので、ウシャは二人を結婚させる。

解釈：表一の①から③は、瓢箪から一組の兄妹が出てきて人類の誕生となり、その後この二人が結婚して人類が繁栄していくのだが、この神話では瓢箪から出てきたのは多くの兄弟姉妹で、彼らは一旦地上に出ると各地に散らばってしまい、残った一組の兄妹を天神ウシャが尽力して結婚させるようになっている。

七段目

二人は結婚したが食べるものは何もなく泥を食べていた。生きていけないので、ウシャは兄妹に粟の種を与え、少しの土地を与えて作物を植えるように言う。農具はないが石斧で削った木の棒を使い種を植える。

八段目

ウシャが四季を創り、多くの穀物を収穫できるようになった。

九段目

当時、食べ物は生で食べていた。猿が木を擦り火を起こしたら、火花が飛び散り森が火事になる。森林の中で焼け死んだ獣を食べたらおいしかったので、猿が火を起こすのを真似て火を得るようになり、食べ

物を煮炊きするようになった。

十段目

木や石の農具では生産が捗らない。鉄で農具や狩りの道具を造り食料を確保する量が増えた。

十一段目

当時、まだ樹木の葉や芭蕉の葉で作った衣服を着ていた。蜘蛛が巣を作るのを真似て、野生の棉を取り、糸にして布を織り衣服を作った。

十二段目

ほどなく、兄妹の産んだ子が育ち、それぞれ違う言葉を話し出しラフ族、ワ族、ハニ族、タイ族、イ族、プーラン族、漢族に分かれて人類が繁栄した。

解釈:表-1の①から③は、狩猟の獲物の食べ方で、ワ族、タイ族、漢族、ハニ族に民族が分かれたとあるが、この神話では話し出した言葉で民族が分かれたと書かれている。しかも、イ族、プーラン族が加わっているのは、ラフ族が彼らが居住する地域にも居住していることが解かり付け加えたのではないと思われる。又、使用する言葉で民族を分けたという記述は1950年代以降の民族調査の結果のことではないだろうか。

おわりに

創世史詩“ムパミバ”は、口頭伝承の伝承上の差異や、地域差、20世紀になり文字にされた時代の収集整理の方法の影響があるとは言え、現在も宗教儀式や祭りで歌われることから見ると、ラフ族にとって特別なものであり自民族の歴史や文化を広め、且つ伝承する手段であるとともに娯楽でもあると言える。

このように“ムパミバ”はラフ族の日常生活に溶け込んで、精神生活と緊密に結びついており、日常生活や社会生活の方法を教える教科書である。

また、中国国家は、無形文化遺産の伝承と保護をするために、2003年以来、中央と省により瀾滄県内の無形文化遺産の調査を始め、12の郷鎮と124の自然村を調査分類しその結果を県人民政府が発表した。

2004年には、ユネスコ「無形文化遺産保護条約」に加入し、2005年に「無形文化遺産保護法」を立法計画に盛り込んだ。2006年に国務院は“ムパミバ”を国家級無形文化遺産に登録した。

以上のような経緯から、“ムパミバ”の価値を認め、広める作業がされていることは確かであるし喜ばしいことであるが、現在、瀾滄ラフ族自治県内で“ムパミバ”の全てを歌える人は一人から二人しかおらず後継者不足が危惧される。

参考文献

I. 日本語

- 百田弥栄子（1961）「中国少数民族の創世神話—彝族の神話を典型として—」『伝承文学研究』24～35伝承文学研究会
- 大林太良（1966）『神話学入門』中央公論社
- 村松一弥（1972）『中国の民話（下）南方—水稻耕作民の世界』毎日新聞社
- 千田九一、松村一弥（1972）「巨人チャヌチャペ—ラフ族民間伝説」『中国の革命と文学13少数民族文学集』188～194平凡社
- 村上順子（1975）「西南中国の少数民族にみられる洪水神話」『東アジアの古代文化』別冊75、97～116大和書房
- 谷野典之（1983）「雲南少数民族の創世神話」『雲南の民族文化』7～51研文出版
- 伊藤清司（1985）『中国民話の旅から—雲貴高原の稲作伝承』日本放送出版協会
- 賈光広等編著 伊藤清司監訳、林雅子訳（1993）「ラフ族」『中国少数民族の信仰と習俗下巻』437～445第一書房
- マリノフスキー著、宮武公夫・高橋巖根訳（1997）「未開心理における神話」『呪術・科学・宗教・神話』127～195人文書院
- チャレ著、片岡樹編訳（2008）『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所
- 岡本雅享（2008）「第4章 雲南省における少数民族語事業と教育」『中国の少数民族教育と言語政策』315～320、334～335社会評論社
- 劉敬榮、張琪著、陸芸娜、山本恭子訳（2010）「金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト

卜報告書第8章 無形文化遺産の観点から見たラフ族創世史詩「ムバミパ」『中国雲南少数民族の無形文化遺産の世界』3～14金沢大学人間社会研究域

II. 中国語

- 中国作家協會雲南分会編（1960）「拉祜族」『雲南民族民間故事選』421～431雲南人民出版社
- 昆明師範學院中文系1957級部分學生收集、劉輝豪整理（1979）『杜帕密帕』雲南人民出版社
- 陶學良（1979）「一部優美的神話敘事詩」『邊境文學』70～72邊境文芸出版社 邊境文芸編集部1979年第3期
- 宋恩常（1980）「拉祜族」『雲南少数民族社會調查研究 下集』28～40、159～169雲南人民出版社
- 山茶編集部（1981）「札努札別」『民族文學季刊 山茶』第一期106～109、148雲南人民出版社
- 陶立璠、李耀宗編（1985）「札努札別的故事」『中国少数民族神話傳說選』333～337四川民族出版社
- 拉祜族簡史編集組（1986）『拉祜族簡史』雲南人民出版社
- 楊亮才編集（1987）「拉祜族」『中国少数民族神話 下卷』389～393中国民間文芸出版社
- 雲南拉祜族民間文學集成編委會（1988）『拉祜族民間文學集成』中国民間文藝出版社
- 拉祜族民間文學集成編委會、孫劍冰編集（1988）『拉祜族民間文學集成』中国民間文藝出版社
- 陶陽、鐘秀著（1989）『中国創世神話』上海人民出版社
- 中国各民族宗教與神話大詞典編審委員會（1990）「拉祜族部分」『中国各民族宗教與神話大詞典』372～376
- 雷波、劉輝豪著（1995）『拉祜族文學簡史』雲南民族出版社
- 本書編集委員會編（1995）「拉祜族民間故事」『中華民族故事體系 第8卷』683～850上海文芸出版社
- 雲南省地方志編纂委員會總編（1998）「第九章 拉祜族語言文字」『雲南省志卷59 少数民族語言文字志』282～283、638雲南人民出版社
- 王正華、和少英（1999）『拉祜族文化史』雲南民族出版社
- 高堯元（2001）『雲南民族村寨調查 拉祜族瀾滄糯福鄉南段老寨』雲南大學出版社
- 中国民間文學集成全國編集委員會編（2003）『中国民間故事集成 雲南卷·上卷』中国ISBN中心出版
- 中国民間文學集成全國編集委員會編（2003）『中国民間故事集成 雲南卷·下卷』中国ISBN中心出版

- 拉祜族簡史修訂本編写組（2008）『拉祜族簡史』民族出版社
- 石春雲（2009）『從葫芦里出來的民族—拉祜族』雲南民族出版社
- 修訂編集委員会編（2009）「瀾滄県拉祜族社会文化調査」『雲南少数民族社会歴史調査資料彙編4』47～49民族出版社
- 楊春（2011）『拉祜族』寧夏人民出版社
- 馬健雄（2013）「第5章 追尋“来自青海”的歷史」『再造的祖先 西南辺境の族群動員 與拉祜族的歷史建構』151～185
- 左玉堂編著（2013）『雲南民族民間文学史』雲南民族出版社
- 姚宝璋主編（2014）「拉祜族」『中国各民族神話・白族、拉祜族、景颇族』158～200山西出版传媒集团、書海出版社
- <http://www.ihchina.cn/show/feiyiweb/html/com>.
- http://www.chinaculture.org/gb/cn_whyc/2006-11/21/content_89527.html
- <http://www.CNKI.net>.

